

小女郎稻荷の記憶を求めて

新山ひろし

神崎川が近い南高浜町に不思議なお稲荷さんがある。赤い鳥居が重なり、その奥に狐の石像が小さな祠を守っている。いかにも素朴な佇まいである。赤い鳥居も、手作りのものらしい。お稲荷様は、赤い前垂れをつけている。なつかしい村のお稲荷様



神と人をつなぐ狐。ここには日本人の素朴な宗教心が残っている

の風情、と言うのだろうか。祠には「小女郎稻荷茶杖尼天」と書かれた額がかかっている。「茶杖尼」はダキニと呼び、インドから来た女神で、人の死を六か月前に知り、その心臓をとって食べるという。いささか怖い神様である。この女神、インドでは狐によく似た「野干」という動物に乗っているが、その動物が日本にはいないので、いつからか狐に乗った姿で現わされるようになった。「狐に乗った女神」から、いつしか、稲荷神と習合し、その不思議な神通力が信仰の対象となってきた。元々、悪を象徴する神様は、仏教と出会うと、仏の守護神となる。興福寺の阿修羅なども悪神から改心して、仏教の守護神になったと言われる。この「小女郎稻荷」が吹田市の民話として語り伝えられている。

「小女郎稲荷」は面白い

まず、小女郎稲荷の民話を紹介してみることにしよう。昔、この稲荷様は観音寺の境内にあり側に池があった。夜になると、

池の側で美しい娘が酒どつくりを持って立っていた。村の若い男がふらふらとやってきて娘と酒を飲んだという。しかし、あくる日、男は「狐に池の水を飲まされた」と仲間からかわれた。男はくやしがつたが、なぜかだました女狐もくやしと思つた。「おまえ、楽しんだら」という気持ちだつた。そこで、狐は、池の水ではなく本当の酒を飲ませてやろうと、酒屋に酒を買いに行つた。酒屋は、女に酒を渡したが、お金は木の葉であることに気がつき、怒つた。しかし、狐は、本当の酒を男に飲ませたことに満足した。そして、次の夜、狐はまた別の酒屋で酒を手に入れる。やはり、木の葉を残して去つていったが、この酒屋は「ああ、狐にだまされた。しかし、お稲荷様に奉仕すると思えばいいのだ」と考え、それ以来、毎夜狐が娘に化けて酒を買いに来たとき、酒を与えた。いつも、一枚の木の葉が残されたという。結局、そのやさしい酒屋の酒「きくぶち」は繁盛し大金持ちになつた、というお話である。主人公の、狐は美しく、色気もある女性である。無償で、男に酒を



飲んでもらつて喜んでいて。ほくも、一度はだまされて酒を飲ませてほしいなと思つたりもする。なかなか、男好みのお話となつている。と同時に、さりげなく、お稲荷様の功德も盛り込んである。これが民話の力というものだろうか。



鳥居が連なっている

小女郎稲荷の宗教的世界

吹田観光の拠点である「浜屋敷」は、小女郎稲荷のすぐ側にある。「浜屋敷」で、誰か「小女郎稲荷」について知っている人がいないかと聞いてみると、ボランティアガイドをしている三谷敏明さんを紹介された。「小女郎稲荷のことを知っている人は、みんな死んでしまった。しかし、祠の横で田中さんが住んでいて、稲荷さんの世話をしている。逢えるかもしれない」と三谷さんは言う。小女郎稲荷への案内を願うと、快く、応じていただいた。三谷さん自身も、稲荷のすぐ側に住んでおられる。「この土地で生まれて育つて、今もここで生活している」と三谷さん。稲荷に行く、田中さんは祠の横の菖蒲池跡を清掃しているところだつた。池の名前のおと、菖



しょうぶを育ててきた田中喜子さん。近所の方も話に加わってきた

蒲が咲いている。この池が、小女郎稲荷の民話に出てくる池だという。「30年ほど前までは、池の水があった。お稲荷さんのお世話をしていたけど、もう少ししたら息子の所に行こうと思う」と田中さん。「もう、昔に亡くなったけど、浜田ツルというおばあちゃんが出て、お稲荷のおまつりをしてきた。餅箱に赤飯のおにぎり、油揚げで包んだご飯を入れて、木の所に置いた。おまつりする時は、ツルさんは、狐みたくに走り出したなあ。びっくりしたよ。普段は、腰が曲がって動けないのにね」と三谷さんは笑う。ちょうど、通りかかった近所の女性も「私も見た。すこかったなあ」と話が盛り上がりつつある。そのツルさんは、いわゆる怨山の「いたこ」のような能力を持っており、巫女として、この稲荷に仕えていたと考えられる。「子供がババアと悪口を言った時、ツルさんは急に走り出して子供を追いかけたこともあった」と三谷さん。小女郎稲荷の民話の世界が、そのまま、この場所に生きています。民話生まれ、語り継がれる現場に立ち会ったような気がした。ふと、お稲荷様を守る狐たちを

狐は人と神との間をつなぐ存在

狐とは、元来、あの世とこの世を行ったり来たりして、人と神様との仲介をする存在と見られてきた。そして、人間と神とが交流する信仰の技として「キツネ憑き」という宗教的な能力を育んでもきた。しかし、現在では小女郎稲荷には、そのような能力を持つている人はいない。この祠を管理している観音寺に電話を入れてみると、ご住職は「小女郎稲荷の場所は観音寺のもの

です。田中さんがいなくなつても私たちがお世話してゆきます。小女郎稲荷は、観音寺の守り神なのですから」と言われる。たしかに、インドの女神として日本にきたダキニだが、稲荷と習合し、仏と出会うことで、仏教の守護神としての位置を手に入れた。僕は、かつて、青森の恐山のイタコ、あるいは、韓国のソウルの郊外で「クツ」という儀式を見てきた。女性が神がかりして、死者の霊を蘇らせ、そこに祀りの時間をつくり出していた。祭りとは、憑依する女性を媒介として、先祖と霊的な交流をすることだつた。小女郎稲荷に感じる「なつかしさ」は、かつてわれわれ日本人が持つていた宗教のかたちであるからにちがいない。



- 参考資料
 - 「石の声 碑の語り」 吹田市広報課発行
 - 「ダキニ信仰とその俗信」 笹間良彦著 第一書房発行
 - 「狐の文学史」 星野五彦著 新泉社
 - 「太陽季刊アミマ狐」 平凡社
 - 「吹田郷土民話かるた」 吹田郷土民話普及会
 - 「神仏習合の本」 学習研究社
 - 「日本妖怪巡礼団」 荒俣宏 集英社